

みみょう幼稚園だより



爽やかな秋空の下、子どもたちの笑顔が一段と生き生きと映える季節の到来です。さて、11月号より、不定期ではありますが、主任からのお話を紹介させていただくことといたしました。何よりも、日頃より顔を合わせてのお話を大切にしておりますが、改めて、子育てや保育に対する思いをご紹介させていただけたらと考えております。ご感想など、直接に伝えていただけますと幸いです。どうぞよろしく願いいたします。(園長 三上)

ぐんぐん伸びろ 好奇心の芽！ 主任 金田 真之介

「見てみて！影が泳いでるよ。」テラスで水入りペットボトルを太陽に当てながら、屈折する光の様子を楽しむ園児の姿が見られました。すると、別の園児が「あっ！色が変わった。」「なんでなんで？」と周りにいた園児たちもしばらくその光を囲んで眺めていました。

子どもは、初めて見るものや感じるものに自ずと疑問を感じます。そして、さまざまな経験を重ね、判断する力や考える力が養われると自分で調べてみようとする探究心が増してきます。まさしく好奇心の芽です。

先日、ノーベル生理学・医学賞を受賞された本庶佑ほんじょたく先生（京都大学特別教授）は、研究の原動力を聞かれると「何かを（自分で）知りたいという好奇心だ」と即答されたそうです。

年長クラスでは4月に興味を持った虫を詳しく調べたいという思いから図鑑を持ち寄ったあそびを楽しみました。気づくと調べるだけでなく、自分だけの発見を見つけ友だちに紹介したり、図鑑もさまざまな分野に広がり、現在も「気づく・驚く・考える」あそびを継続して行っています。

子どもたちが秘めたる好奇心の芽は、自分の力だけで育つことは難しく、周りのあらゆる環境が大切だと思います。世界で初めて飛行機を作った偉人として有名なライト兄弟は、幼少期に古クギや壊れた時計の部品などを拾ってきては「二人の宝箱」と名付けたガラクタ箱に集めて遊んでいました。たとえ彼らがどんなに汚いガラクタを持ち帰ってきたとしても、彼らの父母は決して彼らを叱ることはありませんでした。そして母親は日頃から、「何でもまず自分で考えてみなさい」「不思議だと感じたことは、どんどん自分で調べてみなさい」と温かく見守りながら彼らの好奇心の芽を伸ばすためにあらゆる努力を惜しまなかったのだそうです。子どもたちの興味や関心を尊重し、揺さぶられる心に気づきながらも大人としての経験をすぐに出すのではなく、時には一歩踏み込む瞬間を温かく見守り、時には一緒に考え様々な思いを共有する、これこそが子どもたちの好奇心をのばし、思考の芽をそだてることにつながると思われます。

園児たちに負けないくらい好奇心旺盛な幼稚園の先生たちは、子どもたちの思いや考えをすぐに察知し、さまざまなしかけや環境を工夫しています。今回のみみょうフェスティバルでは、そんな子どもたちの「気づく・驚く・考える」を使ったあそびを最大限にお見せしようとはりきっています。当日は、お子さまと一緒にわくわくしながらご参加ください。そして、これからもいろとりどりの好奇心の芽を育てる喜びを感じながら、みんなで一緒に子どもたちの成長を楽しんでいきましょう！

『私には特別な才能などありません。ただ、ものすごく好奇心が強いです。』

—アルベルト・アインシュタイン(1879年～1955年)